
レディアント3の世界へチート転生???

餡子入りパスタライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レディアント3の世界へチート転生???

【Nコード】

N2566R

【作者名】

餡子入りパスタライス

【あらすじ】

学校帰りにPSP 今にもトラックに轢かれそうな少女を発見
将来自分よりも有望な人材になるであろうと予想 少女を庇い志望
ネ申さまにm9(^^)プギヤー 仕組まれて殺されるとか
不覚にも笑った チート能力を得てテイルズオブザワールドレディ
アントマイソロジー3に降り立つ カノンノは妹(今までで一番の
驚愕)

第1（前書き）

いつまで続くかわかりません m | | (m

第1

僕の名前は猪原慶太いのほらけいたといいますが趣味は読書とゲーム、いつもどおり学校の帰り道をPSでレディアントマイソロジー3をプレイしながら歩いています。

「カノンノ可愛いよカノンノ」

今時あそこまで純粹な娘っていないよね、テイルズシリーズを大半やっていて……こつ悶える萌え要素がなかった気がする。

純粹だけならまだ色々居る気がするけど、好みじゃないんだよねあ~~~~。

歩きながらゲームをする行為はとても危険で注意されることが多いが、やめられないとまらないカップエビ

変な電波を受信した。

《じゃ、一緒に戦おう》

可愛いですけど声が!! 平野さんってどうもハルでツンツンしてるイメージがあったから似合わないと思っていただけ予想外だったぜ!!

「うん!! 一緒に戦おう!!」

戦うのは僕じゃなくて僕の操るディセクターだけだね!!

僕は、実はレディアントマイソロジー1もレディアントマイソロジ

12もクリアしていないへっぽこだったりする。

なんだか途中でめんどくさくなっちゃってやめちゃったんだよね。

H A H A H A ! !

首がちょっとこったなあ〜。

と思い首をあげてみると今にもトラックに轢かれそうな少女を発見。
いかにも有望そうなオーラを纏っている。きっと将来は宇宙飛行士
になるに違いない！

まあ、僕よりも生きてる意味ありそうだよなあ〜。

つと言つこと……。。

「危ないいいい〜（棒読み）」

すぐさま少女を突き飛ばし、少女の位置が僕の位置に変わった。

ドン！！！！！

そして死に様に僕は思った。

（マイソロ3クリアしてなかった）

第2

「m9 (^ ^) プギヤー トラックとか今時古いよワロスwww
w」

はて？ 人って死んだらいきなり貶されるものなのか？

いや、それより……

「誰？」

「神だよwwwつうえwwwつうえww」

「ああ〜そうですか？ 僕のPS どこにいったか知りませんか？」

こんな物が神様だったら世も末だな。

「ここ死後の世界wwwおkwww把握www？」

「死後の世界なんてあつたんですね？ トラックに轢かれたのは覚えていますが、それ以外はなんとやら……」

「普通に会話できるお前異常www 普通は取り乱すか何かするけどやけに冷静だおwww」

「まあ、いいじゃないですか？ ここが死後の世界で更に肢体が付いてるなら僕はここでゲームするだけですから。 なので……僕のP P知りませんか？」

「死んでるのに何も思わないやつ始めて見たwwwそれより今の現
状よりPS を選ぶお前はもう重症www」

「一々癪に障る言い方ですね。まあそんなに聞いてほしいなら聞い
て上げますよ。ほらさつさとしゃべれよネ申さま」

「さつきからトゲトゲしいなwww こまけえこたあいいんだよ！
」

「はあ」

「お前事故死ww仕組んだのはオレwwwカワイソ（
） だからお前に特典つけて異世界に送ることにしたんだZ ！！」

「なるほどなるほど……別に生に執着してたわけじゃなかったから
別にかまいませんけど、普通の人だったらブチギれますよ」

まさかの転生チートのフラグとは……なんというかテンプレかな…？

「まあネ。特典は三つまで、更に世界はテイルズオブザワールドレ
ディアントマイソロジー3の世界だよ！ よかったね！！」

このネ申さまさつきまで僕がそのゲームやってて言ってるのか？
特典は三つ。世界がテイルズオブザワールドレディアントマイソロ
ジー3ってところは嬉しいかな。

「じゃあまず一つ、テイルズオブディスティニ2の裏ボスのマグナ
ディウエスの能力とラストバニッシャの制限解除……つまりHP1
残るとかの制限を解除してもらいたい」

マグナディウエスってカッコいいよね！ 実はバルバトスさんよりも好きだったりする。

「残り2つWWW」

「テイルズオブザワールドレディアントマイソロジー3の世界というところでディセンダーの強化版の能力が欲しい」

「つまりどういうこと？」

「最後までレディアント3をやってはいないけど、ディセンダーの能力は色々とご都合主義だし必要かと思ってね」

「なるほどWWW」

「分かってるのかこいつ……。ディセンダーの能力のうちの一つにラザリス？ だっけそれに侵食された世界を戻す力があるから欲しかった。」

「残り1つつWWW」

「指折りでカウントしているネ申さまを見ているとなんかイラいらつくがまあいいか…。」

「最後に能力の熟練度MAXで」

「意味わかめWWW」

「最初から熟練者みたいにして欲しいってことだよ」

「なるほど〜ゆとりぱあねー W W W W W W」

「これでよろしく」

「じゃ、神様からオマケでプレゼント W W W W W W 行ってからの楽しみ W W W W W」

そして、僕は白の光に包まれてテイルズオブザワールドレディアン
トマイソロジー3の世界へ転生した。

第3 (前書き)

第3

「おぎゃああああ!!!(ここからかよおおお!!!)」

ふと意識を取り戻し、自分の状態を見てみると赤ちゃんでした……。不思議に感じていると、なぜか周囲から男性と女性の話し声が聞こえます。

家族や友人とも違う聞き覚えのない声に耳を澄ますと、こんな会話が聞こえてきます。

「そうか。それにしても双子か……カノンもソプラノもすくすく健気に育って貰いたいものだな」

「はい、このロックスにお任せください!!!」

はい、把握。アレですか……カノンの兄的な立場なわけですか。

隣を見てみるとピンク色の髪をした赤ん坊がいた。

確定かな？ カノンノって言葉が出たぐらいだし、それに、ロックスってあのナツナツツ族だったと思うけど、そういえば元は人間ばい伏線張っていたな、まあいいか……。

「妻と私は戦争のため軍医として戦線地に赴く、もしもの場合カノンノとソプラノを頼むぞ……ロックス」

「そんなことおっしゃらないください大旦那様」

「いつの時代でも嫌な物だな……戦争というやつは」

「はい」

「では、私がこの屋敷を開けているうちはよろしく頼む」

「御武運を」

なんとというシリアスだ……。

そういえばカノンノの両親って戦争に巻き込まれて死んじゃうんだっけ？

コレってまずいよな……。

だからといってこんな赤ん坊の僕に何が出来るのやら……運命とは皮肉なものだな。

それにこの男やっぱロックスだよね……人間だなまごうことなき人間だな。

僕がカノンノの兄として転生したのなら、確実にこの世界を救うデイスエンダーも現れるかな？？

まあ、現れなかったら現れなかったときに考えればいいか。

赤ん坊に出来ることは限られている、なら今は寝て過ぐす。

異様に眠いんだよなあ。はあ

「おやおや、お坊ちゃん起きてしまわれましたか」

今にも眼を閉じそうな僕に向かってそう言うか。

「あううゝ（眠い…）」

もう知らん寝る！..!

生後12ヶ月の日

やはりというかやはり、名も知らぬ父と母が戦争の最中で戦死したようだ。

その報告を聞いたロックスは「お嬢様とお坊ちゃまを守らなければ！！（キリッ）」というのがとても印象的で記憶に残っている。

母と父が戦死した報告の後家では色々な騒動が起こってしまい、危うく家なき子になりそうだった。

まあ、ロックスが色々收拾してくれたおかげか助かっているが、そう長くは持たないだろう。

せめて歩きたいようにはなりたいが中々上手くいかずよくこける。

娯楽といえば、たまにロックスが見せてくれる青空と、使用人から

の話や噂。

噂といつてもたいしたことはなく、ホスチア星晶の発掘のため小国は大国家の体の良い労働力としてこき使われているそうだ、なんというかご愁傷様。

ホスチア星晶とは世界樹が生み出した鉱物資源であり今の生産産業の発展を促した世界樹の恵み。

マナを物質化させたものがホスチア星晶であり、土地が豊かなものホスチア星晶の
マナのおかげである。

ホスチア星晶は産業革命ともいえる重要エネルギー資源であるが、同時に土地に恵みを与える鉱物でもある。

そんな物をどんどん掘り起こしていけば、その土地はマナの恵みを受けられずどんどん土地は痩せ細り枯渇してしまう。

土の栄養分ゼロといつても過言ではない、田畑を耕しても何も育たないし、食物連鎖が崩れてしまっていく。

生態系が変わるかもな……。

それを知っていてもやめられないのが偉い人なのだが……まあ仕方ないのか？

ホスチア星晶の採掘をやめれば色々ところに響くし、人は楽しく生きて生きたいからコレが中々やめられない。

ホスチアそれと星晶のない土地でも普通にマナの恵みを受けられるってどう

いうこと？

そこが未だに分からないところなんだよなあ。

それと我が屋敷の領地の星晶ホスチアは未だ誰の手にも付かず、そのまま残っている。

父と母が居なくなつて領地の長が不在のため権力者が色々好き勝手やっているみたいだ。

後邪魔をするものといえばその領主になりえるカノンノと僕ぐらいかな……

最悪、邪魔者である僕やカノンノはまだ子供、容易に殺せるだろう。

それをさせないのがロックスなんだけどね。

ロックス優秀。マジ優秀さすが自称コンセルジュ。

しかし、いつまでも頼っているわけにはいかない、せめて自分の身は自分で守らないと。

ネ申さまからもらった能力は

？マグナディウスの能力&ラストバニッシャーの制限解除

？ディセンダーの強化版の能力

？熟練度MAX

体はまだ未熟だが、以外に知識が詰め込めることに驚いた。

書斎ばい所にはこの体ではいけないので、近くにあるチラシの情報

をザラーと見たところ頭に入る入る。

きつと晶術なんかもがんばれば覚えられそうだ。

マグナデウスもグランドダッシュャーやエンシエントノヴァが使えるぐらいだし、晶術の素質ぐらいはあるでしょ。

いつかは「貴様のく時」を頂く」を名ゼリフにカッコつけていきますい。

ソプラノ・グラスバレーは今日も一日がんばっていきましょう

第3 (後書き)

* ロックスが人間状態で居るのは敵前逃亡により逃げ出し、死ぬのが嫌でソウルアルケミーの魔道具に手を出す前に助けられたからである。

第4

どうもソプラノ・グラスバレーです。

アレから月日は経ち、とうとう1歳半となりました。

それにより二足歩行が出来るようになり、行動範囲が広がりました。

1歳半で二足歩行していたらロックスや使用人に驚かれてしまい、不覚にも笑ってしまった。

僕が異常なだけでカノンノは普通にハイハイしている。

こう…カノンノに手を伸ばすとこっちに向かって一生懸命ハイハイしてくるんですよ、ほんとそれが可愛くて可愛くて思わずギョってしまっ。

それで「あう、あう」笑顔で言ってくるもんだから萌えました。

それとこのごろロックスに元気がなく毎度会うと微妙に白髪が増えています。

父と母が居なくなってしまったことにより、権力者が図に乗って手を出してくるもんだからロックスがその後始末や、始末書に追われ毎度死にそうになっています。

やはり^{ホスチア}星晶が未発掘地であるココは資源豊かな土地として価値があるみたいで、かなりの人が欲しがりたいです。

ロックスが庭でナイフを片手に鍛錬しているところを見ましたけど、ナイフ捌きがパーネエ。

僕も僕で少し能力の整理と、確認を試みたいと思います。

ビーストロアー、スネークバイト、ドラゴンキャノンなんかは危険だし中でやるときっと被害が出るのでやめにしよう。

ラストバニツシャーはきつと跡形もなく消し飛ぶ。

っというところで、

「きしゃまのときおいただく（貴様の〈時〉を頂く）」

マグナディウスといえばコレでしょコレ!!

しかし、まだ喉の発達が未熟なのかしっかり言えていないところが恥ずかしい。

ブーン!

魔方陣らしきものが出てきた。大体僕を周囲を覆う感じで1mぐらい、魔方陣に書かれている文字を読むけど不明すぎる……、仮にも時を止める技(?)なわけだから普通じゃないことは分かっていたけど……。

まあいいか……。

試しに近くにあった花瓶に近づいてみる。

……悲しい……届かない。

自分が赤ん坊つてこと忘れてたよ2秒ぐらい、花瓶に手が届かない。代わりになるものを探していると、たまたまカノンノがハイハイしてこちらに向かって前進してきている。

人間の時を止めたらどうなるのかあ。未だ調整も出来ているか怪しいのに……。

などど考えているうちにカノンノという凶器がこちらに迫ってきている。

いい加減やばそうなので、すぐさま解除しようとするけど……どうやって解除するのでしょうか？マジで……。

「あう！あう！」

「かのんお！！ きちやだめー！！！」

解除するすが思いつかない。

のでー！！

「にげましゅー！！！」

身長的にドアの部が届かないので、事実上この部屋は密室の状態である。

窓にすらとどかねえー！！

「あう！あう！」

カノンの方を見ると物凄い笑顔でハイハイしてくるものだからついつい抱きしめたくなくなってくるけど……。我慢がまん

解除するすべを見つけれず約10分経過。

やっと解除された……。

それと思うんだけど、あの魔法陣って僕にしか見えないのかな？

カノンが特に反応してなかったし、つといても幼児だし期待するだけ無駄だよな。

やはりというべきか、二足歩行を可能とした僕と未だハイハイが限界なカノンでは速度が違うようで、結構余裕で距離を離せていた。

ふと、カノンの方を見てみると今にも泣きそうな表情で目に涙を溜めている。

ヤバイヤバイヤバイ！！

きつとカノンが泣き出すと、更に白髪が増えたロックスが怖い笑みを浮かべて「お坊ちゃん……妹はもっと退治にしないとダ・メ・ですよ」といつてくるからなあ。

あの状態のロックスを見ていると申し訳ない気持ちになってくる。

泣きそうなカノンをどうにかする方法を考えよう。

まず、何故泣きそうになっているか……。

まあ、簡単に僕が逃げてカノンノが僕が避けていると思ったからかな？

いやいや、赤ん坊がそんな難しい(?) 思考できるか？

安心できる存在が遠くに行って不安で泣きそうになっているのか？

とりあえず結論としては撫で回せばいいのではと考えている。

っというこゝで実行に移そう。

「おーう。よしよしよし!」

ムツゴロウ風味でカノンノを頭を撫でてみた。

「あづ! あづ! うううう!」

よく分かんがきつと喜んでくれているに違いない。

疲れた……。

気づいたら僕とカノンノがベットで寝ていて驚いた。疲れていてそれで寝てしまったようだ、やはり僕も体は赤ん坊なのかどうも生前の頃と違って眠たくなる。

それと使用人……気を利かせてベットまで運んでくれたことは感謝しよう。

けどさあ……まだ僕たち赤ん坊だよ？ 分かっているのかな？

僕たちをせめてベビーベットに寝かせるよ！！

布団が重いよマジで！！

第5

さて、そろそろ定期的に屋敷を追われるか、燃やされるか、あるいは……。

PSPのレディアントマイソロジー3の話では、カノンノが物心を付く前に屋敷を失いロックスと共に教会に保護されるという話があった。

人が物心を付くのは大体4歳ぐらいというし、そろそろかもしれない……。

この世界に転生されてきてからもう3年も経つ。カノンノも歩けるようになりトコトコと僕の後ろを歩くようになってきて可愛いといえば可愛いんですけど、父の書齋にいけないですよこれが。

ちょっと昔にロックスに父の書齋の場所を教えて欲しいと頼み、いくつか書物を貸して欲しいとも頼んだことがある。

ロックスは苦笑しながらもOKを出してくれたので書齋の場所を案内してもらい、中に入った。

中は適度に手入れがされていたのか、ホコリっぽくなかったし、きちんと書物が整理されていた。

本を順番に片っ端から読み、ロックスにペンや紙が必要なので持ってきてもらい作業に移った。

思い出というものは時間が経てば擦れてしまい思い出せなくなっ

しまつたりと意外にポン！ と前世の知識や経験などというのはあつさり無くなつてしまつ。

今は覚えていたとしてもいづれ忘れてしまつたりすり替わつたりしてしまふことだろう。それは知識も同じことであり、言語もそうだ。

世界が違えば理も違う、だから僕は『僕であつた』という証拠に、子供の頃に読んだ絵本や漫画や小説のあらずじ。歌の歌詞。なんか悔しいので小中高と覚えていた『学校で習つた』勉強内容やテレビなどでやっていた科学の仕組み。前世で地味にやってた催眠術のやり方を一冊の書物に記載することにした。

それはそうと、僕がネ申さまから貰つた熟練度MAXの仕組みがようやく分かりました。

あれが結構難しく、経過や過程はどんな方法でも良く、結果が出れば熟練度MAXらしい。

一度目の成功の後に理解し、把握し、知識を得る。

つまり、0回 1回 9999回みたいな感じらしい。

一回成功させてしまえばちよろいもので、その後は制御も完璧、晶術の構成も理解できる。

前に一度マグネデイウスの1m限定の時間停止をして、大変なことがあつたが、あれも起こらなくなつた。

能力の停止の仕方把握したし、もうあんな過ちは犯さないとと思う。

と、話を戻して、現在本棚あたりの本を物色中。

やはりといえはやはりなのか、医療に関する本が棚の7割がたを占めていた。

僕の熟練度能力は一度実行しなければならぬので役に立たない。

さすがに、誰かを実験台にするなんていう勇氣はない。

擦り傷の手当てくらいは、普通に分かるのでいらぬ。

僕の探している本は晶術関連の本だったりします。

ファイアボール、ストーンブラスト、ウィンドカッター、アクアエッジ、ライトニングなどといった初級術が欲しいからです。

初級術が欲しいと思ったのは。調整によって色々な事が出来ると思ったからであり、これから快適な生活を送るとしたら必要そうと思っただからです。

ファイアボールは、火をともし灯りになる。

ストーンブラストは、土木作業で使えるはず。

ウィンドカッターは、風を起こせる。

アクアエッジは、水不足に悩まなくなる。

ライトニングは、かつこいいから。

一部変なのが混ざっているが、それ以外は使い道が多い。

一様使える晶術なんかもありますが……。

エンシエントノヴァ　：範囲も広く威力も高い、きつと近くの森に燃え移り火事になる。

ファイアフルストーム　：台風以上の威力、きつと周りを吸い込み何もなくなるだろう。

グランヴァニツシュ　：地割れ以上の威力、きつと割れ目ができる……根的な物がみえたりしないだろうか？

デイバインセイバー　：雷以上の威力、ライトニングなんて目じゃないほどの雷撃が地面を抉るだろう。

エクセキューション　：　　―　　まで暗黒物質、漆黒の闇の淵へ引きずり込む。だからどうした？

インディグネイトジャッジメント　：サンダーブレイドの剣が豪華になった。きつとあの剣はどこかの宝具なのだろう。

上級術ばっかであり、あくまで予想だが使ったら制御は出来ず、一度は大惨事になるであろう技である。

もし、敵が現れたときは近づいてから時を止めて、スネークバイトで仕留めるか、この上級術になるので出来るだけ手数を増やしたかった。

父の書斎を探してみると案外あるもので、2冊ほど見つけた。

中を開いて見てみると慣れない文字がビッシリと綴られていました。

3歳とだけあって分からないものばかりで、見た瞬間あきらめようとしたが、考え直した。

とりあらず、やり方はなんとなく把握したので後々実行してみたいと思う。

「だーれだ!!」

とっさに目を防がれ、一瞬後ろのやつにスネークバイトしそうになったが、声がカノンノなのでなにかの遊びかと思い、ふと同時に思った……どうやってここまで来た……。

カノンノは父の書斎の場所を知らない。どうせロックスに僕の場所でも聞いてここに来たのだろう。

「カノンノでしょ?」

「さすがおにちゃん!」

目隠しをはずし、後ろを向いた先に居たのはやはりカノンノだった。

「カノンノの声は可愛らしいし、特徴ある声だからこれぐらい分かるよ」

「えへへへ。おにいちゃんはどこでなにしてるの？」

「勉強……？」

「じゃ、私も一緒にする！！」

そんな流れで勉強になってしまったため、作業を断念することにした。

そして、次もその次もその次もカノンノが付いてきて可愛らしいんだけど、僕の邪魔をする。

カノンノとしては僕にかまってもらいたいだけなのだろう。仕方ないといえば仕方ない、無邪気なだけに性質が悪い。それにしたってロックスはどうした？ 世話係じゃないのかアイツは？

まあ、カノンノは可愛いからすぐ許しちゃうけどね！！

仕方ないので可愛らしいカノンノとそれらしい勉強をすることになった。

第6

「では、授業を始めます」

「はい、先生！」

書齋での書物を探しているとカノンノが邪魔をしてくるので、仕方なくゴツゴ遊びを満喫中。

カノンノが邪魔してくるのは、きっと寂しいのと、純粹に僕と遊びたいからだろう。

授業といえば、ロックスがたまに数学をやっており「 $1+1$ は？」なんていう問題を出してくる。

おいおい、僕たちまだ3歳だよ。そんなの覚えられないし、カノンノなんて頭の上に？マーク出してろぞ。

僕たち何気に発達が良いけど、それだけだから。

ロックスはロックスなりに時間をみつけて僕たちを教育していくけど、ハードルが高すぎる！

ロックスは経験や知識が大して無いのか、僕を参考にしてカノンノに教育を施していく、僕みたいに元から知識も経験もないんだから当然ながらカノンノは頭が追いていけない。

「では、今回は『ソウルアルケミー』について勉強したいと思います」

はつきり言ってロックスよりも僕の方がもっとハードルが高い。

まあ、ゴツゴ遊びだしネタ全開である。

3歳だしきつと覚えてないだろうと思ったので実行してみることにした。

「先生！ ソウルアルケミーって何ですか？」

「ドキュメントを操作し、あらゆるものを生み出す術と言われています！ しかし、それには隠された真実があります！ 今は見えませんが、ヴェラトローパというのが次元の狭間に隠されています。まあ、振動数をこの世界まで落とせば可視することが出来ます。その世界に住んでいたヒトの根源であるヒトの祖が使っていたとされる力が今で言うソウルアルケミーになるわけです。しかし、ヒトの祖は世界樹と共に歩もうとソウルアルケミーを捨てて今の人類を繁栄へと導いたのです。質問どうぞ」

「難しすぎて分からないけど、なんでヒトの祖さんはソウルアルケミーを捨てたの？」

「ソウルアルケミーは万物を作り出す力で、もはや神といってもさしつかない能力です。そんな能力を人間が持つてしまえばヒトは努力をしないし、皆で手を取り合っつていこうとは考えません。世界樹とヒトの祖はこの世界にヒトとヒトとの繋がりをもって欲しいと考えたのでしよう。現在使われているソウルアルケミーはヒトの祖が使っていたものの劣化版というのが正しいです。一部の技術者なんか、がんばって復興させているみたいです。」

「すごい！ そんなヒトがいたんだね！」

「ええ……きつと僕たちでは想像のつかないような世界だったのでしょう」

「じゃ！ ドキュメントってなんですか？」

「ドキュメントとは生物の構成を成す設計図のようなものであり、ある一定のレベルの術者ならば可視化にできるみたいです。しかし、その被験者は体力が削られるのであまり長いことすると倒れてしまいます。生物の設計図なので、無理やり弄ると突然変化なんかや稀に起きたりします。種族があるのはこのドキュメントが大きく関わっているといっても過言ではないです」

「お兄ちゃん！ すごいすごいよ！ まるで学者さんみたいでかっこいい！」

「コレがこの世界の理ということですよ（キリッ）」

などというふざけた内容であり、学者さんが聞いたら餓鬼のただの戯言と言っだろうが、これが事実でありどうあっても覆らない世界の根源なのである。

話のしすぎのせいか、テンションが上がってきたので顔に熱が溜まる。

カノンノは3歳だし、きつと覚えていないだろうとふざけ半分ですやってみた授業だが、後々あんなことになるとは思いましなかった……。なんていう展開はないよね？ きつと無いはずだ。

「じゃ、デイセンダーってなに？」

「世界樹から生まれる化身であり、世界を観測する存在である。恐れを知らない者であり、ありえない数の転職の恐れすら知らない。センスの欠片も無く強ければなんでも良いと考えている。どこからかは知らないが四次元ポケットを持っており、3桁以上もある道具を幾つも持ち歩いている。これはきつと世界樹の恩恵なのだろうと考えられる。伝説の装備であるレディアント装備はセンスが悪いと評判でどう見ても希望が象徴とは思えない。そして、大してしゃべらず、話に参加しないと存在自体気づかれない。きつと装備が強ければ葉っぱ一枚でも堂堂と出るだろう……これが恐れを知らないデイセンダーの本当の力だ。……つと僕は思います」

「恐れを知らないなんて凄いな！ 私なんて一人でトイレにも行けないもん……。いつもいつもお兄ちゃんを起こして行ってるから……私もそんな強い気持ちを持ってみたい！」

「がんばってください！」

応援するだけ応援しておこう。

僕の話ってかなりデイセンダーを貶けなしているよな。

暁の従者になんて見つかったら即殺されそうな話だった。

でも、これって事実だし、仕方なくないか？ 僕の操っていたデイセンダーは外見最悪だったし、スキットを見るときは誰も話しかけてくれないし……これって無視されてんじゃねえ？

「では、質問がないようでしたら今日はこれで……」

これで終わらせれば僕のやりたい作業も続けられるし、一件落着。

「じゃ、お兄ちゃん鬼ごっこしよ!!--」

……じゃなかった。

「い」

嫌だ。そういいたかった。

でも、言えない。今にも泣きそうなカノンが目の前に居るからだ。

「……了解」

「お兄ちゃん大好き!!--」

微妙に妹に甘いのはどうにかしたいものだと、つくづく思った。

第7

前回自重していなかった。反省はしているが後悔だけはしていない。人間死ぬときは以外にあつけない、特に僕みたいな『イレギュラー異常』はカノンのような原作が始まるまで生きられるなんて世界補正が掛かっているわけでもない。

能力自体はチート級だが不老不死でもない、人間である以上衣食住が必要となってくるのが当然である。

いつかはこの屋敷から追い出される。もしかして火事かもしれないし、領内での内戦勃発の影響かもしれない。

色々なイレギュラーがあるからそうとも限らないが、別段安心していられるわけでもない。

どんな奴にも生命力（HP？）が存在する。あのチート級のマグナデウスも神様であるが、それと同時に生物でもある。生きている限り死というものは常に存在する。

ただ死にづらいか、死にやすいかぐらいなものかもしれない。

しかし、晶術に『レイズデット』というものがある。

これは味方一人を戦闘不能から回復させる晶術であり、戦闘継続出せるものである。

ただ、2人以上でなければ使えないものでもある。

1人で世界を冒険するには不必要なものであり、パーティ戦では重宝うほうするものである。

覚えておいても損はないと思うが、今必要なものではない。

『リバースドール』

リバースドールは装備しているキャラのHPが0になったときに戦闘不能にならず復活するというアイテムだが、1度発動するとなくなってしまう。

これがあれば1人でもレイズデットと同じ効果を得られる……が。

……そんな物はこの世界に存在しない。

何故無いかは分からないが、ゲーム的都合なのだろう。

こう言ってしまうえば終わりなのだが、僕としては絶対欲しい装飾品である。

製造方法などは謎に包まれているが、理屈はなんとなく分かる。

『ソウルアルケミー』の技術でレイズデットのドキュメントを施せばいけるかもしれない。

しかしながらソウルアルケミーについての知識は原作知識程度なら分かるが、重要な技術や知識どう操作しているのが不明である。

熟練度MAXの能力があるから、最初から最後まで教えてもらって、

ソウルアルケミーをやってみればきつと大丈夫だろうと思う。

熟練度MAX……凄いです……。

ソウルアルケミーといえばハロルド・ベルセリオスやリタ・モルデオ。この二人が詳しくあったような気がする。あと一人いたような気がするけど……誰だっけ？

ハロルドはナナリーは一緒ということは分かるがどこにいるかは不明である。

リタはガルバンゾ国に所属していることは確定なので、ガルバンゾ国に行けば会えるだろう。

カノンノと同じ歳なので今は3歳ぐらいだろう。

……若すぎた……。

こんな歳でソウルアルケミーに携わっているわけがないか……。

しかし、天才と言われるぐらいだし、もしかして……という可能性もある。

カノンノとロックスが生き残るが、僕が生き残れるかは別である。

それは原作補正というやつのおかげである。

少しでも力が欲しいと思う。生き残るために……。

カノンノとロックスには悪いと思うけど、僕は旅に出ようと思う。

旅に出たほうが危ないけど、これも『リバーストール』のため。

幸い、魔物を倒せばガルドは手に入るので、お金には困らないと思う。

戦闘能力はチート級だから、周りを気にしないであれば並大抵の魔物なんて屁でもない。

しかし、魔物を倒せばガルドを稼げるのは分かるけど……どんな不思議？

まあ、そこらへんは目のあたりにしてみないとなんともいえないので保留。

現在のところ自由に使えるのは、

？ 魔方阵内での対象の時間停止（貴様の〈時〉を頂く）

これは魔方阵内にいる対象全ての時を止める能力であり、近接戦闘主本である戦士や剣士に対して圧倒的に有利になれる。

？ スネークバイト（足も可）

その一撃はまさに神速、たとえ掠ったとしても蛇の猛毒は体を蝕む。結構地味なので案外簡単に実行できた。（予想外だった）

？ 初級術（晶術の基礎ぐらいは我が家にあった）

晶術の基礎の基礎。ファイアボールやファーストエイドといったも

の。

これも地味なので案外簡単に・・・

？視界内にいる全対象の防御を低下させる（苦しむヒマを与えぬも慈悲か。通称慈悲）

これは見た目あまり分からないので庭にあつた岩を対象にやった。結果、能力を使わず素手で破壊することが出来た。恐ろしい……。

？浮遊（自分の重量を0にし、回りのベクトルの影響を受けづらくする）

浮く。結構速い

これぐらいである。

他にもあるが、あまりにも破壊力が高いと思つたため実行する気はなかつた。

まあ、我が家でやれば確実に周りがどうなることやら……。

ちよつとぐらいガルド持つて行つても怒られないよね？

書置きぐらいはしておこう。きっとロックスは怒ると思うが、そんなことはもう知らない。

カノンノ……には何か手作りのブレスレットは……技術的に無理なので。スケッチブックでもプレゼントしてあげよう。特に意味は無いがな……。

カキカキカキカキ

書置きも出来た。

前世の頃の記録が書かれている一冊の書物を持っていき、僕はガルドをがめていき、屋敷を飛び出した。

こんなにも世界は広いんだ！！

アホらし……さっさとガルバンゾ国にでも行ってリタにでも接触しますかね。

僕は浮遊しながら目的地に向かい飛んでいった。

その後の屋敷での出来事。

「何ですかこれは!!」

ソプラノお坊ちゃんが見つからないと思い、書庫の方へ行ってみたら一枚の置手紙がおいてありました。

『お土産は期待しないでください（、・・・）
では御武運を（、・・・）
PS カノンと二人きりだからって行ってロリコンに目覚めない
てください。』

後旅に出ました。』

「お兄ちゃん!! お兄ちゃんどこ!!」

兄を探し彷徨さまよっているお嬢様が目に入りました。

「どう説明すればいいんですか旦那様……」

途方に暮れるロックスであった。

第8

現在目的地であるガルバンゾ国に向かって浮遊中。

特に疲れも無く快調である。次から次へと変わる風景を堪能しながら思う……前世ではゲームやPCなど電子機器が発達しすぎたせいで家に籠り外には出なかった。

こんな風景を見てもなにも思わなかっただろう。

しかし、ここは前世の世界と違って科学など大して発展せず、変わりに魔法紛いなものが発展している。前世の頃では空想とでしか考えられなかった『力』がこの世界にはある。

つまるところ……楽しくて楽しくて仕方ないのだwww

今行っている『浮遊』も前世の頃では考えられなかったことだ。

浮遊は結構速いもので大体時速60〜65キロぐらいである。これは馬のサラブレットと同じ速度にあり、人間が出していい速度ではない。

時たま馬車らしき何かを通過する際は笑顔で挨拶し、手を振る。

その時馬車を操っている御者さんの大体はあんぐりと口を開けていてとても驚いている。

こんな身なりの子供が飛行しながら馬車を追い越す姿は少なからず驚かれることだろう。

当たり前といえば当たり前なのだが……。

路銀も少ないし、徒歩で行くにも時間が掛かる。通行手段としての手間は出来るだけ省きたい。

そう考えれば、都合よく『浮遊』なんていう能力あるんだがこっちを使わせてもらいのが一番良いだろうと考えた。

でもやっぱり目立ってしまう。こっちの方は仕方ないと考えて切り捨てるしかないけどね。

道中ウルフの魔物が襲い掛かってきたけど、華麗にスルーさせてもらった。

この浮遊状態なら大半の魔物から逃げ出すことなんてお御茶の子さいさいだし、一々構っていくのもめんどくさい。

今日中にガルバンゾ国着くかは分からないが、がんばっていこうと思っっている。

しばらく飛行していると森の入り口らしきところにたどり着いた。

いかにもヤバ気な感じがする森だが、この先にガルバンゾ国があるような気がする。

足を踏み入れると、どこからともく殺気めいたものをひしひしと肌で感じられる。

ここから先は魔物のテリトリーのようだ。

周りを見渡せば、ちらほらと魔物の姿が見える。

一旦浮遊を解除し、この先を徒歩で歩くことにした。

理由は簡単…… 1対多数戦闘というのを体験してみたいのと、路銀稼ぎ。更にこの森ならば人も寄らないし被害も出ないと考えて本気でやれると考えたからだ。

「では参ります！！」

「

！！」

獣の咆哮が森に木霊する。

現れたのはウルフ族。総数は10体。これぐらいなら余裕だと思う。

薄暗い暗闇の森に一人の少年がただ静かに佇ただすんでいた。だが少年と
いうには幼くせいぜい幼児といったところだろう。

子供が森で迷い、魔物に襲われそうになっている。

第三者から見ればそう捕らえられる光景だろう。

親切心ある人がいればすぐさま助けに向かうような状況だが、僕には関係ない……。

一歩踏み込み、僕の手の届く範囲内に敵をおさめた。近づいた影響

か、ウルフ族は更に唸り、襲い掛かってきた。

「《スネークバイト》」

その一撃はまさに神速。あの機敏に動くウルフ族の目にも留まらぬ速度であった。

華奢な腕から出たとは思えないような一撃がウルフAを襲った。スネークバイトの直撃を受けたウルフAは死にはしなかったものの重症であり動ける状態ではなかった。

しかし、受けた箇所から次第に毒が回ったのか、それから数秒で動かなくなった。

どうやら、まだ腕力が足りないようでウルフAを殺しきることはできなかったようだ。だが、付加効果の毒により死に至^{いた}ったというわけだ。

それに腕がまだ細く短いせい、外傷程度までしかいかなかったよ
うで……まあ、これはこれからの成長に期待するとして……。

一匹倒したことにより、残りの九匹は僕のことを敵として判断した
ようで……九匹全部が襲い掛かってきた……。

思考する時間ぐらい欲しいものだが仕方ない。

「《貴様のく時>を頂く》」

僕を中心に魔方陣が展開されていく。

魔方陣に触れた瞬間ウルフ達はまるで時間が止まったかのような状態で空中で停止した。

「これってほんと…近接最強な技ですね」

魔方陣は相手から視認できないところはカノンノに試してみても分かっていない。

近づくだけで相手の時を奪えるこの能力はやっぱり異常だと思う。まあ、神様が使っていた技な訳だから規格外であることは当然なんだけどね……。

しかし、この魔方陣も30分経つと自動的に消えてしまうという欠点があったりする。でも、能力が異常すぎるせいで大した問題ではないと思う。

消えたらまたやればいいわけだから。

この《貴様のく時>を頂く》は特に消費するものが無いからほとんど無制限なんだよねwww

HPもMPもGカルドだって消費しない。使い勝手がよすぎると思う。

「やて……」

静止しているウルフ達を見ながらどう処理するかを考えている。

スネークバイトを打っていくのもありだけど、……ちょっと……試してみたいところがある。

「上級術試してみますか……」

ウルフ相手に使えば確実にoverkillになる術ばかりであるが、一度は使って熟練度MAXにして使い勝手をよくしておきたいのだ

熟練度MAXにすれば、威力の調整やMPの消費などが減る。そう考えればしておいて損は無いはず。

だがMPの消費に関しては大して意味が無かったりする。

理由は簡単で、エンシエントノヴァ　ファイアフルストーム　グランヴァニツシユ　デイバインセイバー　エクセキューション　などといった晶術はマグナデイウスの能力として登録されているおかげかMPがまったく減らない。

でも、詠唱時間はあるようだ。律儀なようだ。

上級になれば詠唱時間が増えてしまうのは仕方ないことだ、なので後でいろいろ考えたほうがいいと思う。

クレイジーコメントはどうなるか分からない。あれは長すぎる……。

「後々考えましょう。盲目たる信仰……《デイバインセイバー》」

突如、強烈な光が地上を照らし出す。

空を眺めればそこには神々(こうこう)しい光の塊が中に浮いていた。

やがて光は4本の雷を作り出し、地上に降り注いだ。

轟音。まるで神の雷いかすちのようだ。

雷は大地を削りながらもウルフ達を飲み込んでいく。

ついでに言つと僕の視界も雷の光により一瞬真っ白になっていく。

撃つた術者自身には影響ないけどこれは心臓に悪い。

「さて……片付いたことですし先に進みますか」

周りを見渡せばディバインセイバーの影響なのか、森の木々が少し焼け落ちているのが見えた。

耳を澄ませば遠くからガシャン！ガシャン！となにやら聞こえてくる。

「まずいか……いや、もしかしてこれは好機かもしれませんが」

距離的に考えガルバンゾ国がこちら辺を仕切っている可能性がある。

この音から推測して、鎧を着込んでいるだろう。

そこから導き出される答えは……ガルバンゾ国騎士団……。

ここは体てい良く迷子になった振りをして保護してもらつのも手かもしれない。

普通はこんな子供がこんなこと出来るわけないしね……。

と言ひついで……。

「うわあ~~~~ん!~!」

きつと届いたはず……。

「誰だ!? つて子供!?!」

「どうした? 何かあったか?」

そこには幸薄そうな男と、髭を蓄えた男がそこにはいた。

「子供です!?! 子供がいます!~!」

「なんだって!?!」

「うわあ~~~~ん!~!」

とりあえず泣いておこう。決してそれ以外に思いつかないんじゃないんだぞ!

「隊長見てください……まるで雷でも落ちてきたような……」

「だな……いったいなんだったんだろうな」

木々が焼け落ちている光景に隊長といわれた人物と幸薄そうな人物は呆然としていた。

「うわぁぁぁん！」

「とりあえず、ここから離れるぞ！」

「了解です！」

「小僧ここで何があった……？　そして何故ここにいる……？」

「うう……ぐすっ……！　あのね……雷が突然落っこちてきて……う
えええん！」

「よほど衝撃的だったんでしょっか」

「だな……」

「子供は保護しますか？」

「当たり前だ。こんなところに置いて行っちゃったら魔物に食われ
るだろうが！」

「はっ！……」

「小僧一緒に付いてきてもらっぞ」

っというところで、あっさりとガルバンゾ国に進入することができた。
隊長さんが結構質問するもんだから泣き真似を一つするのはめになっ
てしまった。

いやね……僕って言い訳考えるの苦手なんですよ実は……。

第9

どうもソプラノです。色々な過程を省いてガルバンゾ国の侵入に成功した。

しかしながら気分が悪い。未だかつて無い馬の揺れに耐え切れず、途中で吐きそうになったがそんな失態はおしたくないので結構がんばった。

前世の頃から乗り物酔いにはなりやすかったが、これはたぶん違うのだろう。まあ、まだ体が出来上がっていないしこうなることは少し予想していたのだが…気分が悪い…。

「おい大丈夫か…?」

「平気ですよ…うっぷ…」

現在馬から降りて孤児院に向かっている。

何故孤児院に向かって歩いていくかという点、色々と揉め事があったからだとは思いが真意は分からない。

一度それとなく聞いてみたが、なんとというかはぐらかされ聞けないままである。

この件については一時期保留となり、このような措置をとったのだろう。後々質問攻めにされるかもしれないけどそのときは記憶喪失者として装えば大丈夫なはず。

身分を証明するものが一切無いので、かなり不審に思われるかもしれないけどそれは仕方ないと僕はあきらめている。

これでも3歳なので大丈夫なはず…たぶん。

「着いたぞ」

「うわあ〜」

見るからに孤児院だ。

老朽化なんかも進んでところどころが傷んでいるが、手入れなんかが行き届いているのか質素であるが清潔感漂う孤児院である。

周りを見渡せば僕とそう歳の変わらない子なんかもいっぱいいる。僕が気がなるのか皆^{みな}こちらの方を向いている。

そして、視線が好戦的な気がするが…何故だろうか。

「みんな集まれ！！」

隊長さんの言葉に子供たちが寄ってくる。

「これからこの孤児院にお世話になるソプラノ君だ！ みんな仲良くしてくれ」

それだけ言つと隊長さんは去っていく……ちよっ！ まっ！

言うだけ言つて置いていくのか隊長さん！

とりあえず自己紹介だけでもしておこう。こつ…もの珍しそうな目で見られても手持ちがあまり無いのだが…（意味不明）

「どうもソプラノです。これからよろしくお願いします」

その頭を下げ挨拶をした。

ヒソヒソヒソヒソ……。

子供達は子供達で何か話し合いをしているようだ。

ふと目を向ける先には、茶髪の髪をした少女がなにやら金属のガラクタらしきものを弄繰り回しているのが見えた。一人なにかを黙々と作業をこなしている姿はどことなく人を寄せ付けないオーラが漂っている。表情が暗くどことなく不機嫌に見えるため周りから勘違いされやすいタイプなのだろうと思う。

精神年齢が高いのか、プライドが高いのか、意地っ張りなのか……僕にはそんなもの関係ない。子供は基本甘えたがりやであるはずである。…僕も子供であるがそれは例外である。精神面の成長は子供の頃から養われるものであるはずだ。

とりあえず寄ってみることにした。

「どうもソプラノです。これからよろしくお願いします」

「ああ、新入りね……。どうもよろしく」

少女は作業をやめて顔を一度上げ、僕の顔を見た。見たのは一瞬であつたがその瞳からは人への『興味心』といものがまったく感じら

れなかった。そして視線を手元の方へ戻しすぐ作業に戻った。

「なにやってるんですか？」

3歳児じゃないだろコイツ……。精神の方はかなり成熟している感がある。むしろ最低限の挨拶しかしないとい点では、まるで冷めてしまった現代社会人のようにも感じられる。

はつきり言って、寂しいと思う。

この子に足りないものはコミュニケーション能力だと思う。なので丁度少女の手元にある機械(?)について聞いてみたいと思う。

「話してもアンタじゃ理解できないでしょ？ 話しかけないで……」

初見でこれは心折れる……。威圧感ばいものも感じられ、邪魔、どけ、っといった感じだ。これでは反感を買うようなものだ。敵対心丸出しなのは、子供の好きな物の執着心が邪魔されたといった純粹な心なのであろう。

「ごめんなさい。それで君の名前は？」

名前を聞いていなかった。人の名前を聞くことは最初の始まりでもある。それを忘れていた僕って……。やっぱりインドア派だったからかな？

「…………リタ・モルディオ…………」

驚いて声も出せなかった。

いやだってゴータグらないんだもん分かんないだろ。リタのトレード

マークって言えばはGoogleでしょ！？ いやいや、もしかして同姓同名な方かもという可能性もあるのでまだ確定ではない。

「もしかしてそれってプラスチック魔導器ですか？」

ピク！

そう少しリタの眉が動いたのが見えた。

「へえ〜。ただの馬鹿っぽい餓鬼かと思ったけど、そうでもないみたいね」

はい確定！！

こんな異常なまでの3歳児普通いな。3歳でプラスチック魔導器(?)を弄くっている天才児、どこ探してもここにいるリタぐらいなもんだ。

これで念願の『リバースドール』に一步近づいた！！

リバースドールの研究に協力してもらうには、まずリタに『ソウルアルケミー』の技術について学んでもらう必要がある。しかし、これはもう少ししてからの方が良いかも知れないと思った。今の歳は外で遊んだり、話したり、親睦の仲を深めるのが必須である。まずは、信頼関係から築きずいていかなければならない。

それに、こつも荒んだフロム脳(ゲーム脳)を静養せいようさせる良い機会かもしれない。これを気に少し遊ぼうと思う。

「一緒に外出て遊びませんか？」

ざわざわざわ……。

ギャラリーがざわついた。その仲の一人が

「りたちゃん!! いっしょにお外であそぼうよ!!」

「おにっご!! おにっご!!」

「うわぁーい!! やろやろ!!」

「ちょっとあんた達……! ソプラノあんた助けなさいよ!!」

そしてズルズルと年少さん達に引っ張られていくリタ。

「そぶらのちゃんもおにっご!! おにっご!!」

「はい!! 今いきまーす!!」

最初は嫌々ながらのリタだったが、次第に年少組と仲良くなっていく。

リタのはしゃぎ回る姿は本来あるべき子供の姿。

きっかけがあればこんなにも簡単なものなのだ。

「あはははwwおいでー」

「逃げるな!!」

なお僕はリタに捕まらない程度の速度で孤児院の周りを走っていた。

「リタちゃん変わったね!」

「うん! たのしい!」

「みんな! そぶらのをつかまえるおー!」

突然全員の標的にされてしまった。これはこれで……。「楽しい」
からいいや

第9 (後書き)

日常(?)って難しい。

みんな遊び疲れいるようだ。面倒くさがらず風呂に入っていく。普通子供ってお風呂嫌がるのに…積極的に入って行く子や嫌々ながら引きづられていく子など色々いたが最終的に『一人』を除いてみんなで汗を洗い流した。もちろん僕も参加して洗いつこに参加した。流石にまだ純粹な子供達に手をだすなんて変態ヘドみたいなのはしない。普通に楽しく洗いつこしたのであった。

そして、風呂に入らず一人部屋の片隅で魔導器フラスティアを弄くりまわしている者がいた。

「お風呂に入らないんですか？」

「嫌よ」

リタ・モルディオその本人であった。何度も話しかけても頑として魔導器フラスティアから手を離さず汗だくの状態でなおも作業をしていた。風呂が嫌いなのか？ 魔導器フラスティアがよほど好きなのか？ どちらにしてもリタが汗臭いことには変わらない。

「ベタベタしていて気持ち悪くないんですか？」

「もう潤滑油じゅんかつゆなんて慣れてるわよ。気にしなきゃ大したことないもの。そんなの後で洗えば落ちるし」

「そういう意味じゃないんだけど…あれだけ動いたんですから服にも汗が染み付いているでしょう？ それに一度お風呂に入ってサッパリしていった方がいいと思いますよ？」

今のリタからは微^{かす}かだが異臭が漂ってくる。こんな状態で夜を明かしたら衛生的によくはないだろう。

「今日は面倒くさいし、明日風呂は入るわよ」

それじゃ遅いんだが……。なんでもかんでも面倒くさがるのはやめていただきたい！ ほら隊長さんが困った顔してるじゃないか！

僕の見た先には本当に困った顔をしている隊長さんがいた。（そして未だ名前を聞いていない）

この孤児院はどうやら隊長さんのポケットマネーから出ているらしい。国の方が孤児院を設立しようと支援に乗り出したらしいが、星^{ホス}晶^{チテ}の問題もありガルバンゾ国は内戦状態にあるらしくあまり余裕が無いそうだ。自然の豊かさをとるか、生活の豊かさをとるかで今二つの勢力に分かれていて結構緊迫な状態である。

まあ、とりあえず…隊長さんお疲れ様…。

「モルディオよ久しぶりにお前の外で遊ぶ様子が見られて俺は嬉しかった。だがモルディオは女の子だもつと身だしなみも整えて女の子らしくすればどうだ？ 風呂に入らないとさっぱりしないぞ？

リタも不潔な奴だとは思われたくないだろ？ 風呂はな心も体も洗い流してくれる。風呂が嫌、風呂が嫌と言って入るのを拒むと好きな人が出来たときに「クサ…」とか言われちまうぞ、オレはモルディオにそんな辛い思いはさせたくないんだ。…モルディオ…オレをそんな蔑^{あは}んだ目で見るのはやめてくれ。つまるところ…風呂は入ろうな…」

「勝手に決め付けないでくんない？ 人の価値観なんてそれぞれ

違うでしょ。それに私は3日に一度は入ってるからいいのよ。身だしなみなんて適当でいいのよ適当で」

「ならおじさんが隅々（すみずみ）まで洗ってやるうか？」

「変態オヤジ死ね」

「オレはモルデイが風呂に入るまでどかないぞ」

「あーもう！ うつさいわねー！ 私の勝手でしょ！」

「あ…だってオレお前のこと思って…」

「あーあー！ もういいわよ！！ 入るわよ入ればいんでしょ！？

」

「そう言われて入らなかったことあるよな？」

「だって絶対じゃないもの」

「よし…ソプラノよモルデイの監視を頼む」

「はあ…まあいいですけど…」

突然話を振られた。僕としても賛成なのでリタのお目付け役ぐらいは買って出よう。

「ちょっとソプラノまで付いて来る気?!」

「3歳同士なんだし、そう恥ずかしがることも無いだろう。それと

もおじさんが洗ってやるのか？」

「行くわよソプラノ！！」

「了解つと」

「そうばっさりと言われると、おじさんのガラスハートの心がブロウクンされそうだ」

そして現在風呂場である。

ついでだからリタと一緒に風呂に入ろうと思う。

脱衣所で僕も服を脱ぐ。上着に手を掛けた状態でこちらを睨みつけてくるリタ。こちらも負けじと睨み返す。だぶんこれは出て行けと目で訴えているのだろう。いやそれだと僕が風呂に入れないし…まだ3歳なんだから見られたぐらいなんだというのだ。

「脱げないんですか？」

「なっ！！ そんな訳ないでしょ！！」

「しー。寝ている人もいますから静かにしてください」

「アンタに見られるのが恥ずかしいのよ！」

「恥ずかしがる理由なんてないでしょ？」

「アンタは『男』私は『女』別々に分かれて入るって言うのが筋で

しよ」

「いやだつて3歳だし…そこまで考えなくても大丈夫なんじゃないでしょうか？」

僕は全部脱ぎ捨てて、頭にタオルを置いてリタに歩み寄る。…僕平然とやってるけど歳を重ねればこれって立派な犯罪だよな…。

「ちよー！！ アンタ前隠しなさいよ！！」

顔を真つ赤にするリタ。いや、前を隠せて『男』なら生えていて当然だろ…。むしろこの歳なら興味の対象とでしか見られないだろ。3歳がコレを見て顔を真つ赤にさせること自体が間違っている。知識も何も無いんだから…。ああ…なるほど…。

「さすが天才というべきですか…分かつちゃってるんだ」

カノンノと一緒にいるときは特にコレを気にせずキヤーキヤーと笑いながら風呂場で遊んだものだ。これが普通だと思っただが。

「ああもう！ 先に行つてなさい！」

「…それはちよつと困りますね…このまま逃げ出されたら隊長さんの言いつけ守れませんからここで待ってます」

しばらくすると脱ぎ始め、無言で風呂場まで歩いていった。その後を僕は付いていった。

わしゃわしゃわしゃ。

リタは現在頭を洗っている。僕は体をさっさと洗い湯船につかっている。

「リタってシンデレレですよね」

「……………」

反応なし。僕をいないことにしているらしい。

仕方がない。湯船から僕は上がった。そして近くにあった石鹸を片手に持ち、こつそりと足音を立てないようにリタの背後に接近。石鹸を床に置き、湯船に戻った。僕のやっていることは石鹸を床に置いて対象を転ばせるアレだ。

「ミッションコンプリート」

「……………!!」

あ、こけた。

見事石鹸に足をとられ尻餅をついたリタ。尻を擦りながらこちらを睨んでくる。

「ソプラノ!! あんたって奴は!!」

「あははははは!!」

見事にトラップが決まったので嬉しい。

これからは適度にからかおうかと思う僕であった。

第11（前書き）

読みづらかったら教えてください。

第11

「ギルド？」

「ギルドないんですか？」

唐突だが、現在隊長さん（名前不明）にギルドのある場所を聞こうと質問している。たしか、ガルバンゾ国にもギルドがあったはず。レディアント3では話が出てきてはいたのだが確認が欲しいのだ。今も健在している知識であるが、いずれかはぼやけるかもしれない。もしかして今がそのときかもしれない。そのために本なんかにまとめたんだが……不安の一言に尽きる。

「いや、そんなことはないが……。ソプラノお前何する気だよ」

怪しげな顔で見ってくる隊長。

「」

同時に確証が得られたので少し上機嫌になる僕。やはりギルドはあるらしい。よかったと思うと同時に少し安堵あんどした。未だ保有する知識はまだズレがないようだ。

「そんなニコニコ笑顔で言われても困るんだが」

「ギルドに興味あるだけですよ。別に変なことしようとしてるわけじゃありません」

これは嘘だ。ギルドには興味があるし、ファンタジー系トリップ小

説みたいに冒険とかしてみたい。冒険と言ってもここから出て行く気は無いので、行って帰る旅行の日帰りのものしておこうと思う。マグナデイウスのチート能力ならまず負けないわけだし、これからも努力し続ければ能力が向上することだろう。

だが、慢心はいかん慢心は。

「それなら別に構わないんだが……」

「隊長さんは人を疑いすぎですよ？ 僕みたい何か崇めた方がいいですよ。きつと心が穏やかになります」

僕みたい何かを対象にして崇めるが良いと思う。宗教的な戦争にならない程度の信仰範囲なら問題ない。ついでに僕は神様を崇めていたりする。マグナデイウス

「ソプラノって子供なのにモルディみたいに大人っぽいよな……いや、胡散臭いだけか」

「失礼な!!」

胡散臭くはないと思う……。ちょっと特殊なだけだ、リタは知らない。リタは純粹に天才なんじゃないかと思う。後世に残るような天才科学者だし、補正が掛かってるんじゃないの？

「そこまで元気なら『例のコト』詳しく聞けそうだな」

例のコトと聞いて一瞬ピンときた。ここは歳相応にして回避しようと思う。

「わあ〜い！ おそらがあおい！ おそとであそぼ〜」

我ながらアホらしい演技であるということは明白である。隊長ならいざ知れず、他の人にやるとなると少し抵抗感がでるかもしれない。

「いきなり幼児退行すんな」

もっともなことを言う隊長である。だがしかし、3歳児なら今の状態が普通であるはずだ。リタと僕のせいで、隊長の中での3歳児はちよつと一般とはかけ離れている特殊な幼児になっていることだろう。

「うわあ〜い……。そこを退けええエエツ！！」

けっして本気ではない。つついシャウトしてしまったのだ。これに特に意味は無い。

僕は少し跳躍して右手を突き出し、突破口を開く。みるみる内に拳は隊長に吸い込まれるかのようにして距離を縮めていく。

「危なツ！！」

本能的に感じたのだろう。隊長はとつさに避けた。……もともと当てるつもりはなかった。

ほんとだよ！ほんとだからな！

そして青空に向かって駆け出した。それはまるで青春ドラマのように。

side ????

まったく今日については……。

下町を散策していたら、何故か知らないが5歳ぐらいの子が泣いている姿を目撃した。

下町の人たちの温情を受けながら育った身として、こんな子供を一人にするなんていうこんな状況を放っておく訳には行かない。困った奴らがいたら助けてやるのが常識だから……。

「親御さんと逸れちまったのか？」

その声を掛けると涙声をあげながら顔を上げた。

子供は目元まで涙が溜まっており、よほど泣いていたのか目が充血していた。この間誰もこの子供を気に掛けなかったのか、いささか疑問に思うがこんな面倒ごとを引き受けてくれる善人なんざ多くはない。少なくともないが……。

「えぐうっ……グスっ……！ ママとはぐれちゃった！！ うわぁぁん！！！」

母親と逸れてしまったようだ。見つけたくてもここまで広いと見つかるまでに時間が掛かる。

下町だからといって舐めないほうが良い、道と道が入り組んでおり更に狭い路地、簡単な迷路ぐらいにはなるんだ。

買い物している最中なのは分からねえけど子供から目を離すのは

気をつけたほうが良いと思うぜ母親は。今頃母親は子供を捜して走り回っているだろうから何れ見つかるだろうとは思っただけだな…。

「泣くな泣くな、それでも男の子が」

俺は屈み、子供と同じぐらいの目線にまで腰を落とした。ついでに言うと俺は今年で8歳になる。

8歳である俺がさつきから5歳の子に子供子供と心で思っているが、俺も大して変わらねえ。

あえて言うなら背が少し高いぐらいだな。

「とりあえず一緒にママを探してやるから泣き止め。な？」

ポンつと頭の上に手を置き撫でた。

「うん！　ありがとおにいちゃん！」

しばらくすると母親が見つかった。母親は何度も俺に感謝を申し上げた。俺としては自己満足なものだし気にしなくてもよかったと言ったが、それでも母親は何度も何度もお礼の言葉を言ってくれた。悪い気はしなかった。

子供は母親に飛びつくとき手を強く握り締めた。母親も強く握り返しており、もう二度と手を離さないという気持ちで伝わってくる。

「おにいちゃんありがとう！」

「ほんとすいません。ありがとうございます」

「ああ、次からは迷子になるんじゃないぞ」

子供は満面の笑みを浮かべながら大きく手を振り、母親と一緒に歩き始めた。その姿はまさに『家族』この下町で何よりも俺が守りたいものの一つだ。

そして、俺は家に帰った。

「ただいま……って誰もいねえか」

父親はおらず、母親は自分を生んで間もなく亡くなっており現在は一人暮らしをしている。

ふと脳裏にあの家族のことを思い浮かべた。

「今日も一人寂しく夕飯でも食べてますかねえ……」

一人で準備し、特にいつもと変わらない素っ気無い料理を作り、すぐさま間食した。片付けに入り消灯、家から全ての光が消えた。この広い家にはベッドが3つあるが使われているのは1つだけ、俺は布団に入り静かに眠る。家が物静かになった。ただ広い部屋には飾りつけなど無く、最小限生活が出来る物以外を除いて、売り払い現金に変えた。この家にはもう思い出らしきものはもうこの家だけになっちゃった。

俺の名前はユーリ・ローウェル、帝都ザーフィアスの下町に住んでいる町人だ。

第11（後書き）

mtgに突込みがある人は感想お願いします

第12

どうもソプラノです。

今は金銭的なものは実は持っていない。家出をするときに気がついたのだが、通貨って場所によって相場が決まっていそうな気がして期待通りの物になると思えなかったのだ。

ガルドは万国共通な通貨とは思うが、念には念を入れてガルドで宝石を購入した。

宝石はどこの国でも価値は同じだと思うので、これを売れば最低でもその通貨は手に入る。

何度でも言うが、ガルドが万国共通でないかもしれないと念には念を入れた結果である。

さて、問題は宝石を扱ってくれる店があるかどうかなのだが、そこからへんは特に問題ないと思う。

ゲームでは武器屋、防具屋、道具屋、食材屋、その他で、全て買い取ってくれている。

現実的に考えて、道具屋、食材屋が宝石を買い取って、それをどうするのが不思議だ。

武器屋や防具屋ならば問題ない。装飾品なんかで使うこと間違いない。

で、もう一つの問題は子供が宝石を売れるかどうかなのだが……これは以外に問題ないかもしれない。

しばらく歩いてみると、剣の絵が描かれている看板を発見。

すごく分かりやすくいいと思う。

さて、交渉に入ろうか……て言ってもただ単に売るだけなんだけどな。交渉とかいらないとマジいらねえ、ぼったくる奴いたらスネークバイトで殴る。これは決定だ。自身の決定である。社会のルールを守らないやつは……その場に応じて考えよう。

店の中に入ってみるとカウンター越しにスキンヘアーのマツチヨのおっさんが居た。

僕が入ると米国にいるボビーさんといい勝負が出来るぐらいの笑顔を見せてきた。

その笑顔に威圧感を感じるのには僕だけか？ コレは一種の恐怖である。何も知らない子供が見たらトラウマものであること確定。店員さんは愛想良くしようとしているだけかもしれないけど、それはむしろ逆効果なんじゃないかと思う。

僕の背がまだ低いせいとかカウンターまで届かない。

困った、困った。非常に困った。浮遊して浮かすのは問題なので近くにあった椅子を引っ張ってきて土台にした。これで店員さんと同じ目線で話せるはず。

「これ買い取ってください」

「HA HA HA お買い物の手伝いかい、偉いねえ」

それ以上は言わない。店員さんあなたはさっさと宝石を買い取って私にガルドを提供すればいいのだ。等価交換ってやつだよ。僕はさっさとこの店から出て外で色々と遊びたいんだよ！ こんなところで談笑してる場合じゃないんだ。

「宝石か…これぐらいなら10万ガルドといったところか」

「じゃ、それをお願いします」

やはり、どこの国でもガルドは共通貨幣なのだと思い知った。しかし、子供でも物売れるってことはもしかして商売もやれるのでは？

僕はやるうとは思わないのでやらないけどこの世界がファンタジーだから出来ることなのだろうか？

「ではまたのご来店を！」

「はい」

表面上優等生をやっているも損は無いので、基本的には紳士でいこうとは思っている。

だから地の文と会話の落差が激しいのだ。って誰に話してるんだろうか。

さて、資金はある。だからといって今すぐ買いたいものがあるというわけではない。

ふと、視線を張巡^{りめぐ}らせると、空き地的な物を発見したのでそこで少し考えをまとめようと思う。

「は、はっ！」

そこには木刀の素振りをする黒髪の少年がいた。ずいぶん熱心なことでと思う。

「ん？ あ、わりい邪魔だったか？」

「そんなことはありませんよ。むしろ僕の方が邪魔してしまいました。すみません」

僕は邪魔にならないように空き地の隅の方へ移動し、黒髪少年の鍛錬^{マクナディウス}(?)を見届けることにした。

神様補正のせいかステータスが異常高いことは生まれたその瞬間か

ら分かっていたし、別に鍛錬しなくてもねえ……？ と、最初の頃は考えていた。しかし、慢心はいかん慢心は。

いつの間にか後ろからズブリなんてパターンも否定できないし、人として生まれたからには生涯安心して暮らしたいと僕は思う。

地味ではあるが鍛錬をすれば地味にステータスが上がる。

しかし、それよりも魔物を倒してレベルアップのほうが激しく効率が良い。

まあ、初期の能力で勝てる魔物といえば、かのグランコクマに在住のピオニー陛下が愛玩動物しているブウサギぐらいなものだろう。

あれなら五歳児でも木刀で撲殺できるぐらい雑魚なので、案外楽々なのだが、残念なことにブウサキはピオニー陛下の権力と地位と国の財源の元保護されており、うかつには手が出せないようになってしまった。

どんだけブウサギ好きなんだよピオニー陛下……。

なので、地味に鍛錬したそこら辺に居る魔物フルボッコにしてやるのが一番良いと考えられる。

あ……植物系の魔物なら一発火をつければ焼却出来るし、もしかしてレベルが上がるかもしれない。

魔物に火をくべるだけで100レベルになった冒険者……ないわ。

素振りをしている少年を見ていて思う……コイツ絶対もてる……！

子供の頃からこんなにも凜々しい顔しやがって……！

キヤーかつこいい抱いて！

とかいつか言われるに違いない！

仕方ない……。

「僕と組み手してくれませんか？」

先制攻撃をする。これで断られたらイクラちゃん風にキレやろう。

ばぶ〜ww

「別に構まねえが……歳の割りにずいぶんと大人しいのな、おまえ。その歳ならお前……普通の子供ならかまえかまえて煩いにな……

……」

うん。それが常識です。僕とリタが異常なだけで、普通の3歳児は敬語も使わないし、組み手しようぜ（キリッ）なんてお願いしないでらう。

「お前っていう名前じゃありませんよ。僕の名前はソプラノ・グラスバレーといいます。どうぞよろしくお願いします」

いや、別に名前がお前お前といわれて怒っているわけじゃないんだよな、これが。

ぶっちゃけ名前とかどうでもいい。太郎だろうが次郎だろうがイヌだろうが、名称があれば困らないし、……ってこれは別にいいや。

「ああ……そうかすまねえ。オレの名前はユーリ・ローウェルっていうんだ、よろしく」

ユーリは握手のつもりなのか手を差し出してきた。ああ……挨拶的な握手か。

ん？ この名前聞いたことがあるような無いような……。

思い出せない……。

「うん！ よろしくねユーリ！」

年齢相応に笑顔で挨拶したが、反応は普通だった。

いや、別に期待してないぞ。

「しかし、そんな子供の頃から組み手っておm……ソプラノはまだ身体が出来上がってないんじゃないかねえのか？」

なにこの子……ファンタジー世界で『子供の体は出来上がってない』なんて常識的な考え持つなんて、案外博学なのか？ 見た目10歳だし頭良いのかもしれない。

「18782+18782は？」

「は？」

ダメだった。

これではつと答えられる奴居るとするなら、結構頭の良い人種か、意味を把握したやつぐらいだろ。

「お願いします組み手をしてください!」

ここにきて土下座をする僕。

こう……理由を聞くな、家の事情が、母さんが……的なオーラで土下座したので哀れんでくれるだろう。

哀れんでくれた心優しいユーリ君はきつと……。

「しかたねえ……理由は聞かないでやってやるよ」

こんな感じで返事をするだろうと思っていた。

予想通り。やっぱり下町の人たちは情に弱いようだ。

「ありがとうございます!」

組み手の相手してくれて。

「おう!」

元気な返事だなあ……。

「木刀ばっかぶん回してんから、素手での戦闘なんて初めてだな……」

それで、組み手を了承してくれる貴方が眩しいです。

「ちょっと痛かったらすまん」

蹴る殴るボコル。実に痛そうだ。

「……一つ質問いいですか？」

「ん？」

「別に倒してしまってもいいんですか？」

「誰を？」

「ユーリさんを」

「やれるもんならやってみやがれ！」

「では……いきます！」

僕はまず地を強く蹴りユーリと距離を開けた。

だいたい3mほどだろう。僕の身体能力に最初ユーリはポカンと口を開けて理解できなかったようだ。

「ユーリさん木刀を別に使っても構いませんよ」

組み手なんて口実だった。

僕は経験したかったんだ『対人戦』を。

魔物とそれなりに戦ってきた僕だが、対人戦の経験は全くといっていいほどない。

「お前嘘ついてたのか……？」

「僕って嘘とか好きじゃないんですよ」

「ならなんで……？」

「それは……ぶつかり合えば分かるはずですよ」

うん、ごめん。ぶつかり合ってもきつと僕の考えはユーリ君には分からない。

「……さっきのを見て思った。お前『強い』だろ」

「さあ、びびりでしょ？」

ユーリは静かに近くにあった木刀を片手に構えを取った。

「すまねえが……手加減できねえぞ！」

「ドンときてくださいー！」

ユーリが距離をつめようと走りこんでくる。

そのまま勢いに乗り木刀を前に突き出す。

牙突がとつに似た動作だが、右拳に力を溜めているのが見てとれる。

たぶん、牙突^{がとつ}はフェイント。避けたところを腹パンするのだろう。
実に痛そうだ。

パンツー！

糸も簡単に僕は目の前まできた木刀を左手で払い、ユーリの顔を見た。

驚愕の顔と、勝ち誇った顔両方が見えた。

「終わりだぜソプラノ」

「残念そうもいかないんですよこれが……」

なんか、気的なものが込められた拳が僕の腹に向けて直進する。

そこで使用する僕特有のスキル《浮遊》一瞬にして体重がゼロになり、身体が何も縛られない状態になった。

結果として、トリツキな動きも出来るようになった。

バク宙バク転は当たり前、マトリックすも軽々とこなすぐらい体が軽くなる。

僕は2mほど空に飛び、ユーリの背後を取った。

そして、しゃがみ込みユーリに足払いをした。

……この動作は実に疲れる……主にユーリの首が。

元より、僕の背は小さい3歳児と10歳ではそもそも身長差が違う、そのためユーリはこの僕を見下したかのような角度で僕を見ることになる。

そして、次。僕に腹パンするため、一時的だが腰を屈ませないといけない。僕はそれを避けて空に飛んだ。それによりユーリの首が上に上がり、ちよつとだけ表層意識が「地味に首が痛い」「地味に眩しい」「地味に腰が痛い」などなど、急激な動きによりちよつとだけ動きが鈍くなる。

そして僕は背後に回り、足払いをした。

まあ。こんなもんでしょ。

僕の視線の先には地面に頭をぶつけ気絶しているユーリが居た。

《スネークバイト》使わなくたってヒトは倒せることが分かった。

ユーリには感謝したいと思う。

なので。

「《ファーストエイド》」

しばらくすれば目を覚ますだろう。

ふと思い返せば、自分の行動が意味不明すぎるということに孤児院に帰ってから気づくソプラノだった。

第12（後書き）

一瞬背後に回りこんだという描写を書いていて。

アーーーーッ！！ と書きそつになって危なかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2566r/>

レディアント3の世界へチート転生???

2011年8月16日16時51分発行